

近代中国語の敬語の語用論的考察*

彭 国 躍

(国際交流基金日本語国際センター)

キーワード: 近代中国語, 語用論, 敬語, 丁寧さの原理, 会話の含意

1. 本研究の目的

近代中国語に敬語表現があったということは一般に知られている事実である¹⁾。しかし、中国社会の伝統的な敬語現象に対する従来の考察には、昔かくかくしかじかの敬語表現があったという事実確認のようなものが多く、これらの敬語現象を体系的にどう捉え、どのような枠組で記述するかはいまだに未解決の問題として残っている。本研究は、語用論の視点から、従来中国社会で敬語と称されるものの性質について考え、敬語表現が成立する語用論的条件、個々の敬語表現間の体系的なつながりを検討し、伝統的な敬語現象と儒教文化の礼儀との関係について考察する。

2. 先行研究

2.1. Leech の丁寧さの原理

G. N. Leech (1983) は、H. P. Grice の会話の協調の原理とその諸原則だけでは人々は何故時折自分の考えをストレートに表現せずに間接的な話法を使用し

* 本稿は、日本語学会第 103 回大会 (南山大学, 1991.10) での口頭発表論文『近代中国語の敬語の修辭的性質と語用論的「高さの方略」について』をもとに、修正、加筆したものである。本研究に対してご指導下さった大阪大学の徳川宗賢先生、真田信治先生、関西大学の日下恒夫先生、大会において貴重なコメントを頂いた井出祥子先生、井上史雄先生、そして草稿の段階で大変有益な助言を下された『言語研究』の二人の査読委員に深く感謝の意を表したい。

1) ここでの近代中国語の概念は王力の説に従う。王 (1957) によれば、近代中国語は13世紀から19世紀まで (元末, 明, 清時代) の中国語を指す。

たりするのか、その動機について説明できないということを描した。彼はいかに自分の意志を伝達するだけでなく、いかに社会的均衡、他人との友好的な関係を維持するかも人間のコミュニケーションの目指す重要なゴールの一つと主張し、言語のこの対人関係的機能を「丁寧さの原理」によって記述した。

丁寧さの原理:

- (a) 礼儀に適うとは言えないような信念を表す表現を最小限にせよ。
- (b) 礼儀に適うような信念を表す表現を最大限にせよ。

(Leech 1983: 81)

そして、丁寧さの原理を守るための具体的な方策として、Leech は更に次の 6 つの原則を設けた。1. 気配りの原則、2. 寛大性の原則、3. 是認の原則、4. 謙遜の原則、5. 合意の原則、6. 共感の原則。それぞれの原則に (a)、(b) という二つの副原則が付き、(a) の副原則は積極的に丁寧さを示し、(b) の副原則は相手への無礼を避けるという消極的な丁寧さを示すものである。(Leech 1983: 131-138)

Leech は、このような一連の原理と原則を設けることによって各言語社会に普遍的に存在する対人関係の修辭現象に関する一般語用論的モデルを提供した。

以上の 6 つの原則のうち、是認の原則と謙遜の原則は本研究と深く関わっているので、その定義を引用しておく。

- 是認の原則: (a) 他者の非難を最小限にせよ。
 (b) 他者の賞賛を最大限にせよ。
 謙遜の原則: (a) 自己の賞賛を最小限にせよ。
 (b) 自己の非難を最大限にせよ。

(Leech 1983: 132, 山梨 1986: 198, 小泉 1990: 277, 278)

Leech によれば、是認の原則と謙遜の原則は対になって機能するもので、それぞれ「話し手の発言が他者と自己についての何らかの善し悪しの評価を伝えるその度合いに関係している」(Leech 1983: 132)。つまり最大限に相手にプラス評価を、自己にマイナス評価を与えることが礼儀に適い、丁寧な言語行動の一つになるということである。

2.2. Gu の中国語の敬語の「自卑の原則」

Yueguo Gu (顧曰国 1990) は、現代中国語の敬語を考察する際、主に英語のデータによって得られた Leech の諸原則に当てはまらない敬語現象の存在を指摘した。その一つは古代中国語によく使われ現代中国語にもその影響を残している伝統的な敬語表現（敬辞、謙辞）である。Gu はこのような中国社会の伝統的な敬語現象を処理するために、「自卑の原則」(The Self-denigration Maxim) を設けた。そして「自卑の原則」は自己謙讓と他者尊敬の二つの側面をもっているとしている。

自卑の原則: (a) 自己をへりくだって表現せよ。

(b) 他者を立てて表現せよ。(Gu 1990: 246)

Gu (1990) は次の会話の例を引用して「貴姓、尊姓」のような敬辞と「小弟、賤姓」のような謙辞の使用は自卑の原則が適用された結果だとしている。

甲: 您貴姓? 【お名前は何とおっしゃいますか。〈あなたの貴い名字は。〉】

乙: 小弟姓鄺。【鄺と申します。〈小さい弟の名字は鄺です。〉】

您尊姓? 【お名前は。〈あなたの尊ぶべき名字は。〉】

甲: 賤姓章。【章と申します。〈私のいやしい名字は章です。〉】

(Gu 1990: 246)

(日本語訳は筆者による。[]の中は意識を、〈 〉の中は逐語訳を示す。)

Gu は、ここで「貴姓、尊姓」は他者を立てる表現（「敬辞」）で、「賤姓、小弟」は自らへりくだる表現（「謙辞」）だということを自明のこととして扱っている。しかし、謙遜しようとする時、自分のことを「小さい弟」、自分の名前を「卑しい名前」と言うのは、決して人間社会の共通する現象ではなく、自明なこととは言えない。Gu の「自卑の原則」が適用される前に、まず「敬辞」、「謙辞」とは何か、何を根拠としてそれを特定するか、「貴姓、尊姓、賤姓、小弟」のような表現はなぜ対人的な修辞の機能をもっているか、などといった疑問にぶつかることになる。

3. 近代中国語の敬語の特性

これから、近代中国語の敬語がもっている幾つかの特性について、日本語の敬

語現象と比較しながら、検討していきたい。

議論に入る前に、まずここで使われているいくつかの術語の定義を示しておく。

ここで言う語用論とは、言語と、発話時の場面、参与者の間の人間関係（話し手と聞き手、話題人物との関係）などを含めたコンテキストとの相関関係に関する研究である。これでもって、言語とその指示対象との関係を扱う意味論と区別する。意味論研究の対象は、発話のコンテキストから独立した語や文の額面通りの意味、命題的な意味であるのに対して、語用論研究の焦点は、コンテキストにかかわる具体的な言語使用における発話の意味である。(Levinson 1983: 20, 池上 1985: 78)

言語とコンテキストが様々な形で拘わりあっていることはこれまでの語用論の研究で明らかになった。言語とコンテキストとの関係が言語そのものの構造の中で反映されることもあれば、文字通りの意味を介して会話の推意の過程で反映されることもある。コンテキストの条件が言語構造の中で記号化又は文法化される現象は、直示体系 (deixis) と呼ばれる。そして、コンテキストの条件が発話の推意の過程で言外の意味として反映される現象は、会話の含意 (conversational implicature) と呼ばれる。

S. C. Levinson (1983) によれば、直示体系は、更に、1) 人称の直示、2) 時の直示、3) 場所の直示、4) 談話の直示、5) 社会的直示、の5つに下位区分される。社会的直示については、Levinson に従って次のように定義する。

社会的直示: 会話参与者間の社会的関係を記号化する言語構造の諸相。

(Levinson 1983: 89)

3.1. 非直示的性質

日本語では、発話参与者間の社会的関係を調節する機能は、動詞の場合は、特殊な敬語動詞（「いらっしゃる」「参る」など）の外に、尊敬表現として「お～になる」、「～（ら）れる」、謙譲表現として「お～する」のような統語パターンで表し、名詞の場合は、一般的に漢語に「ご」、和語に「お」という特定の接頭語を付けることによって表すことになっている。発話参与者間の社会的関係を表す表現形式（形態）はこのように言語構造内で特定することができる。対人関係上

の必要があり、「和語名詞」という統語条件が揃えば、「お」という記号を使用するというようなことは文化化又は規則化されている。例えば、相手の名前に言及する場合には、「お名前」と表現する。待遇的な意味は「お」という形態に直接結び付いているので、ここでは外のいかなる形態も「お」に取って代わることはできない。「お」という言語形式を取ってしまえば、待遇的な意味も消えてしまう。このように、日本語の敬語は、指示対象（名前など）や待遇の意味（他者尊敬と自己謙譲など）が決まれば、敬語接辞を付けるにせよ、敬語語彙を選ぶにせよ、それぞれ言語構造の中で記号化された特定の形態を使用するので、対人関係の修辭機能は社会的直示の方法で示すことになっている。

近代中国語の敬語では、同じく相手の名前に言及する場合、その名詞の前によく「尊」という語を付けて「尊姓」と表現する。しかし、同じ待遇的な意味効果を持つものとして「尊姓」以外に、

貴姓、高姓、上姓、大名、賢名……

などその他の様々な形態の使用もまた可能である。この場合、日本語では、待遇的な機能を一つの特定の記号でもって示すのに対して、中国語では、一つの待遇的な機能を不特定多数の形態でもって示すことになっている。

このような現象は決して相手の名前に言及する場合の特例ではない。もう一例を上げる。話し手が社会的地位の高い人に対して又は改まった場面において自分のことを呼ぶ場合、日本語では「ぼく」、「おれ」に対応する謙譲表現「わたくし」を使うが、近代中国語では、このような特定の謙譲語のかわりに、話し手の立場に応じて、

卑人、賤弟、敝官、下士、小人、愚妹、貧僧……

などの種々様々な表現形式を使うことになっている。

これらの現象を通じて、中国語の敬語の次の2つの特徴を確認することができる。

〈1〉 形態の異なる複数の表現が同じ待遇的な機能を果すことができる。この特徴からこれらの表現の敬語としての機能は特定の言語形式に結び付いていないことが分かる。

〈2〉 以上の2例に上げた敬語表現「尊、貴、高、上、大、賢、卑、賤、敝、

下, 小, 愚, 貧」は, それぞれ「とうとい, たかい, うえ, おおきい, かしこい, いやしい, やぶれた, した, ちいさい, おろか, まずしい」という意味論的な意味概念を持っている。そして, これらの表現は, 敬語使用のコンテキストを離れば, すべてその額面通りの意味として使うことができる。

以上の2つの特徴は, 中国語の敬語は, 特定の形態そのものを敬語の標識として規定するものではないことを示している。つまり中国語の敬語は, 発話参与者の社会的関係の記号化を規定する社会的直示の方法で表すものではないことを示している。中国語の敬語に, 日本語の敬語「お+動詞+になる」, 「お+動詞+する」, 「ご+漢語名詞」, 「お+和語名詞」などのような文法的な規則性が見いだせないのは, 中国語の敬語のこの非直示的性質とかかわりがあると思われる。中国語の敬語は非直示的で, その対人関係のコンテキストが特定の表現形式に結び付いていないとすれば, その敬語としての機能は一体どのように生まれたのだろう。次節でこの問題を更に掘り下げていく。

3.2. 会話の含意の性質

前節で示したように, 日本語の敬語は, 直示体系に属し, 個々の表現形式は直接対人的修辭機能を示すことになっている。そこには意味論的な指示概念は含まれていない。したがって, われわれは, 「お」, 「ご」, 「お～になる」などの表現に対して, 「(意味論的に) 何を意味するか」という問いには答えられない。これらの表現は語源的にはそれぞれ意味概念のあることばから変化してきたかもしれないが, 現に敬語として使用する場合には, 発話参与者間の社会的関係を示す記号として使われるもので, 決してその語源の意味を表すためのものではない。なぜなら, これらの表現の語源的な意味と同義のことばに置き換えても敬語としての効果は生じてこないからである。

しかし, 3.1. で指摘したように, 近代中国語の敬語には意味論的な意味概念は依然として残っている。「尊」にその同義語「貴」を, 「高」にその同義語「上」を取り替えても同じように敬語としての効果を生み出すことができる。中国語の敬語のこの同義語互換の特徴と, 尊敬表現と謙讓表現の間に見れる反意的特徴(尊(貴)→卑(賤), 大→小, 賢→愚, 高(上)→下……)から見ると, その額

面通りの意味は語源的にはなく、これらの表現が敬語として使用される場合にも生きていることが伺われる。

近代中国語の敬語表現に含まれる意味論的意味概念と語用論的対人関係の意味効力との関連付けについて筆者は次のように考える。

中国語の敬語の待遇的な意味効力はその表現の文字通りの意味内容を介して伝えられた会話の含意に属する意味内容である。

中国語の敬語の意味は、なぜ会話の含意に属し、それがいかにして算出されるかについて、彭 (1991) は次のような分析をした。

明代の口語小説『金瓶梅詞話』(以下用例の出典を頭文字で略す)に、ある若い女性が近所のある豪族の家の奥さんたちに対して次のような発話をしている。

- (1) 蝸居小舍，娘們肯下降，奴已定奉請。[むさくるしいあばらやですけど、奥様がいらして下さるんでしたら、かならずお招きします。]『金』14章

話者はこの発話の中で、高い所から低い所へ移動するという意味の動詞「下降<降りる>」を同一水平上に移動する聞き手の動作に対して使っている。Grice の会話の協調の原理に則して言えば、これは明らかに「質の原則」に違反している (Grice 1975: 47)。それにもかかわらず、偽りの発話にならず、コミュニケーションが成立したということは、この発話に何か外の原理や原則が「質の原則」に優先して適用されたと考えられる。この外の原理とは、Leech が主張した言語の対人関係の機能を規定する「丁寧さの原理」(2.1. 参照)だと考えられる。

では、当時の中国社会では、慣習的にどのような表現を礼儀に適うような信念を表すものと見なしたのだろうか。また「丁寧さの原理」を満足させるために、その社会での共通認識としてどのような語用論的方略が存在していたのだろうか。

(1)の発話が「質の原則」に違反してもコミュニケーションが成り立つことに対して次のような仮説を立てて説明する。

例(1)の発話が成立し、「下降」という表現から敬語的含意が生まれ得たのは、「丁寧さの原理」のために取られる発話参加者の位置付けに関する「高さの方略」の適用が行われたからだと仮定する。

高さの方略: (a) 他者を高い所に位置付けて表現せよ。

(b) 自己を低い所に位置付けて表現せよ。

この方略は、上下、親疎などにおける話し手と聞き手との間の社会的関係を物理的な上下、高低の位置関係に置き換えて表現することを規定する機能として働く。発話(1)の文字通りの意味から敬語としての含意が生まれる推意の過程を次のように記述することができる。

- (i) 話し手は発話(1)を発した。
- (ii) 話し手は同一水平上に移動する聞き手の動作を、高い所から低い所へ移動する動作のように(「下降」を使って)表現している。これは明らかに会話の「質の原則」に違反している。その結果、話し手が不誠実か、発話が別の意図で行われたかのどちらかになる。
- (iii) 不誠実でないためには、話し手は「質の原則」を破らなければならない正当な理由がなければならない。
- (iv) 話し手は、「質の原則」を破る正当な理由として丁寧さのための「高さの方略」を知っている。そして話し手は聞き手が「高さの方略」を知っていることを知っている。
- (v) 話し手は「高さの方略」に従って相手を高いところに位置付けて表現することにより、発話(1)に自分が丁寧に振る舞っていることを含意させる。
- (vi) 聞き手が発話(1)の丁寧な含意を理解することにより、話し手が「質の原則」を破ったことによって生じたかもしれない不誠実の可能性が解消される。

この「高さの方略」を設けることによって、「下降」ということばの、高い所から降りるといった言語と事実との関係を規定する意味論的意味から、丁寧に振る舞うという言語と言語使用者との関係を規定する語用論的意味が生じたことを論理的に説明することができる。

この「高さの方略」が適用されれば、文字通りの意味から丁寧さの含意が生まれるゆえ、語形的には日本語のように特定の記号で直示せず、高さに関する意味関係を表す複数の語形(表現群)を、敬語表現として使うことができることになる。したがって、「高さの方略」という丁寧さにまつわる原則を利用して、「高名」、「上姓」、「府上【お宅】」、「下臨【お越しになる】」、「下顧【ご配慮下さる】、

「俯納【お納めになる】」, 「垂愛【ご愛顧下さる】」のような尊敬表現と, 「舍下【自分の家】」, 「房下【家内】」, 「在下【わたくし】」, 「久仰【かねがねお伺いしている】」, 「登堂【お宅をお訪ねする】」, 「失瞻【お目にかかれなくて失礼】」のような謙讓表現の成立を一つの語用論的原則で説明することが可能になる。こうして形態の上で統一されない様々な敬語表現をこの「高さの方略」のもとで, 統括して説明することができる。つまり, この「高さの方略」という仮説は個別的な現象に対してではなく, 多くの言語事実を説明することができ, 当時の人々の言語行動の一つの指針として存在したと認めることができる。

語用論的な方略によって推意される会話の含意の性質は, 高さ以外の尺度に関連する敬語表現にも当てはまるものである。例えば, 相手のことを「賢公〈賢い旦那様〉」と呼び, 自分のことを「愚妹〈愚かな妹〉」と呼ぶような表現も, 本来に相手と自分との間でどちらが知的レベルが高いかという事実を伝えるためのものではなく, 対人関係の方略の一つとしての「賢さの方略」(4.2.3. 参照)の適用によって発話に丁寧さの含意を含ませるためのものである。

3.3. 「是認」, 「謙遜」の両原則と「敬辞」, 「謙辞」とのかかわり

3.1. で上げた例(相手の名前と話し手自身を表す表現)のように, 中国語の伝統の敬語現象には相手と自己との間に何らかの評価を与えて表現するという特徴が見られる。相手のことを「貴い, 高い, 大きい, 賢い……」などとプラスに評価し, 自己のことを「卑しい, 低い, 小さい, 愚か……」などとマイナスに評価する。中国語の敬語のこの特徴と Leech の是認, 謙遜の両原則との間に, ある一致点が見られる。その一致点とは, つまり両方とも相手と自己に何らかの価値的評価を与えることによって丁寧さの意味を含意させるという点である。但し, 中国語の「敬辞」, 「謙辞」と称される表現が意味する他者賞賛, 自己非難の行為と, Leech が示した英語社会での他者賞賛, 自己非難の行為との間に, 是認, 謙遜の両原則の適用の仕方において相違が見られる。その相違は次の二つの点に現れている。

3.3.1. 他者賞賛と自己非難における積極性

Leech によれば、英語社会では丁寧さの諸原則 (2.1. 参照) の中で、消極的に無礼を回避する副原則(a)の方が、積極的に丁寧さを示す副原則(b)より、より重要性が高いものである (Leech 1983: 133). 「是認の原則」と「謙遜の原則」で言うと、つまり、他者への賞賛と自己への非難を積極的に行うよりも他者への非難と自己への賞賛を回避することが英語社会でより重要性を持つということである。この原則の適用の仕方における特徴は近代中国社会には当てはまらないようである。その一例として、中国の近代小説に随所に見られる次のような出会いの挨拶をあげる。

(2) A: 敢問賢公尊號? [お名前は何とおっしゃいますか <賢い旦那様の尊い号をお尋ねします>.]

B: 賤號四泉。[四泉と申します <いやしい號は四泉です>.] 『金』36章

この会話は聞き手 A が答え手 B に対して、「賢い〜、貴い〜」などと褒めたたえることから始まっている。A は B に名前を尋ねると同時に、B への賞賛によって礼儀的に振る舞い、B への丁寧さの貸しを作っている。それに対して、B は「いやしい〜」と自己への非難をすることによって丁寧さの借りを返しつつ、A の質問に答えた。「是認の原則」と「謙遜の原則」両方の副原則 (b) (2.1. 参照) が大変積極的に行われている姿が見られる。英語社会では通常相手の名前を聞く前にまず自分の名前を告げるのが礼儀的である (Gu 1990)。なぜなら相手の名前を聞くことは相手に何らかの負担を負わせる行為につながるからである。この例に示されたように、中国社会では先に相手の名前を聞くことは、先に相手賞賛のチャンスを手にするということでもあるので、その方がむしろ礼儀的である。

敬辞と謙辞の使用は、「是認」、「謙遜」両原則の副原則 (b) の適用が積極的に行われた結果だと言える。

3.3.2. 他者賞賛と自己非難における慣習性

Leech は、「是認の原則」と「謙遜の原則」の適用状況を記述する場合、話者が表現上の制限を何ら受けず、発話その時その時のコンテクストに応じて自由に相手を褒めたたえたり、自分のことを謙遜して言ったりするような現象を指して

いる。例えば、「最近体が大きくなった」という表現が賞賛になるか、非難になるか、又はどちらでもないただの事実表現になるかは、その発話の対象がお相撲さんかファッションモデルかそれとも妊婦かによって違ってくる。このような場合、「大きい」という評価にどういう価値的判断がなされたか、プラス評価なのかマイナス評価なのかは決まっていない。つまり、物事の善し悪しに関する評価の基準そのものは制限されていない。どんな表現が他者賞賛又は自己非難になるかはまったく発話当時の話題内容によるものである。このような原則の適用の仕方をここでは非慣習的な適用と呼ぶことにする。

それに対して、是認、謙遜両原則が適用される時、言語表現に対する方向づけとして、ある一定の社会的制約を受ける場合のことを慣習的な適用と呼ぶ。是認、謙遜両原則が慣習的に適用される場合に受ける制約は、特定の言語社会での社会的理念、文化的価値観に基づくものである。この社会的理念、文化的価値観は、両原則が非慣習的に適用される場合のように個々の発話内容によって変わるものではなく、社会全体の共通認識として存在するものである。両原則が適用される時、社会的に承認された特定の枠組の中で表現するという制約を受ける。近代中国語の敬語が示す他者賞賛と自己非難は中国社会で定められたある一定の枠組の中で慣習的に行われたものである。例えば、「尊姓」、「卑人」、「賢名」、「愚妹」、「大名」、「小人」、「上姓」、「下士」、「降臨」、「登堂」などの表現のように、「尊い、賢い、大きい、高い……」ことは好ましいことで、相手のことをこのように評価することは相手を褒めたたえることであり、礼儀的である。好ましくない状況とされる「卑しい、愚か、小さい、低い……」などの評価は、自分自身に与え、自己非難をすることによって礼儀的に振る舞うことになる。

ここでの慣習化とは、あくまでもどんな評価が他者賞賛と自己非難に利用されるかにおける意味概念上の慣習化のことで、同じ意味概念を表す表現の中で、どんな言語形式を使うかは制限されていない。いわゆる形態上の記号化、形式化はなされていないので、社会的直示としての敬語表現とは異なる。

4. 近代中国語における敬語の語用論的体系

中国語の敬語に関するこれまでの伝統的な研究では、敬語表現を、発話参与者

間の社会的関係を示す単なる恣意的な記号として、語彙別にばらばらに処理していたため、それぞれの表現の間に存在する相互関係、敬語表現としての体系的なつながりが見失われた。中国社会での伝統的な敬語現象の間に見られる体系的なつながりと、敬語表現を恣意的な記号とするこれまでの研究実態との間に大きなギャップが感じられる。この節では、このギャップを埋めるべく、近代中国語の敬語体系の輪郭を浮き彫りにしたいと思う。

4.1. 価値的評価の体系

3.3. で指摘したように、Leech の是認と謙遜の原則は中国語の敬語と深いかわりを持っているが、中国社会において、是認と謙遜の原則が適用された表現は、すべて「敬辞」、「謙辞」になるというわけではない。是認、謙遜の原則が適用されても、慣習的に特定された枠組の中でないと、中国の社会的、文化的環境の中では「敬語」として認められない。中国社会において、いかなる方法で相手を賞賛し、自己を非難するかという言語使用に関する価値観の枠組が存在し、この枠組の中で行われた相手賞賛と自己非難の行為を中国社会で「敬語」として認める。したがって、中国の社会的、文化的環境の中で生まれた「敬語現象」を説明するには、Leech の是認、謙遜の両原則の適用のみでは不十分である。中国語の伝統的な敬語現象を説明するために、是認、謙遜の両原則の適用から、具体的な表現が選出されるまでの間に、適用条件を限定するために、更に具体的な方策が必要である。

3.2. で「高さの方略」を設けたことによって、高さに関する種々様々な敬語表現を一つの語用論的指針の下で体系的に説明することができるようになった。ところが、中国語の敬語には、高さの尺度以外の意味概念を持つ語が多く含まれているので、中国語の敬語を機能させるには、高さに関連する表現とその以外の意味概念を表す敬語表現を含めた包括的な方策が必要となる。

「貴、高、大、賢……」などの評価はそれぞれ異なる尺度を基準としているので、一見互いに無関係のように見えるが、その中に物事に関するプラスの価値的判断が含まれるという点で共通性をもっている。そして、「賤、下、小、愚……」などにはすべて物事へのマイナスの価値的評価が含まれる。敬語としての意味は

相手に対してプラス評価を与え、自分に対してマイナス評価を与えることによって生じるものである。この意味において、中国語の伝統的な敬語現象には一つの価値的評価の体系が存在していると見ることができる。この価値的評価の体系は、どんな形態を使うかではなく、対面行動においてどのように相手と自己を評価するかを規定する言語使用の体系である。この体系を機能させるのは、次の「価値的評価の原則」である。

価値的評価の原則: (a) 他者にプラスの評価を最大限に与えよ。

(b) 自己にマイナスの評価を最大限に与えよ。

この価値的評価の原則は、中国社会で価値的評価の枠組として承認された種々の尺度の上で適用される。種々の尺度を表す表現を敬語として機能させるために、各尺度にそれぞれ「価値的評価の原則」の下位原則としての方略の適用が必要である。

中国語の敬語表現に慣習的に利用される価値的評価の尺度には、基本的に次の表に上げた六つの尺度がある。この六つの尺度はすべての敬語表現を網羅するとまでは言えないが、近代中国語の敬語にもっとも多く利用された尺度である。

表 1

価値的評価の原則	プラス評価	マイナス評価	価値的評価の尺度
優劣の方略	優れる	劣る	優劣の尺度
貴さの方略	貴い	卑しい	貴さの尺度
賢さの方略	賢い	愚か	賢さの尺度
高さの方略	高い	低い	高さの尺度
大きさの方略	大きい	小さい	大きさの尺度
豊かさの方略	豊か	貧しい	豊かさの尺度
……	……	……	……

これらの尺度は、価値的評価そのものを直接指示する「優劣の尺度」を除いて、すべて価値的評価のメタファー的表示法に属する。その内、「貴さの尺度」、「賢さの尺度」などのようにその価値的基準が人間社会に共通するようなものもあれ

ば、「大きさの尺度」、「高さの尺度」などのように各言語社会、文化、サブカルチャーなどによって違うものもある。すべての社会において大きいものに必ずしも好ましい評価を与えるとは限らない。例えば、ヨーロッパのトラピスト修道会のような社会では物質を所有することに関して「より小さいことはよりよいことである」という価値観を持っている (Lakoff and Johnson 1980, 訳本: 35)。そして、物理的に下にいる者は常にマイナスの評価を受けるとも限らない。近代中国語の敬語に「尊, 卑, 貴, 賤, 大, 小, 高, 上, 下……」のような表現が使われたのは、近代中国社会という特定の時代、特定の文化的環境の中でこのような価値観が存在していたことを反映している。当時の人々は礼儀的な言語行動として慣習的にこのような価値的評価の枠の中で他者賞賛と自己非難を行ったのである。

異なる言語形式が同じ待遇的効果を果し得るのは、これらの表現のすべてがそれぞれ違う尺度の中で共通の「価値的評価の原則」を守っているからである。3. 1. で指摘した「尊姓, 貴姓, 高姓, 上姓, 大名, 賢名, 卑人, 賤弟, 敝官, 下士, 小人, 愚妹, 貧僧……」などのような敬語現象について、「価値的評価の原則」とその下位方略を使って、体系的に一括して説明することができる。

4.2. 価値的評価の諸方略とその適用例

以下、「価値的評価の原則」が各々の尺度の中で適用される場合、その下位原則としての諸方略がどのように順守され、具体的にどのような表現が使われるかを事例で示す。例文はすべて近代中国語の口語体（白話）小説に現れた会話文である。下線を引いた部分は敬語として各尺度に利用された表現である。

4.2.1. 優劣の方略とその適用例

優劣の方略: (a) 他者のことを優れたものとして表現せよ。

(b) 自己のことを劣ったものとして表現せよ。

次は「優劣の方略」が適用された事例である。

- (1) 先生住在令親家, 早晚常進來走走。【<立派な>ご親戚のお宅に泊まれるなら、よく遊びにお越し下さい。】『儒』33章

- (2) 動問神仙, 高名雅號? 【お名前〈神仙の高い名と雅やかな號〉は何とおっしゃいますか.】『金』29章
- (3) 這華居, 其实住不得, 将来當事拜往. 【この〈華やかな〉お部屋に泊まるわけにはいきません. 後程またお伺いします.】『儒』3章
- (4) ……使劣叔老懷不勝欣慰. 【わたくし〈だめなおじ〉は喜びに堪えません.】『儒』6章
- (5) 他是高要縣人, 同敝處, 周老先生是親戚. 【彼は高要縣の人で, わたくしの〈ぼろぼろの〉處の周さんとは親戚同士です.】『儒』7章
- (6) 拙夫今日衙門中理公事去了, 還未來家哩. 【〈つたない〉主人は今日は役所へ出ておまして, まだ戻っておりません.】『金』43章

4.2.2. 貴さの方略とその適用例

貴さの方略: (a) 他者のことを貴ぶべきものとして表現せよ.

(b) 自己のことを卑しむべきものとして表現せよ.

次は「貴さの方略」が適用された例である.

- (7) 既是尊意如此, 自然遵命. 【こういう〈とうとい〉お気持ちなら, 当然私も従います.】『屨』7章
- (8) 他大娘貴庚? 【お宅の大奥様の〈とうとい〉お年はおいくつですか.】『金』13章
- (9) 你今年多少尊庚? 【あなたの〈とうとい〉お年はおいくつですか.】『儒』15章
- (10) 請先觀貴造, 然後觀相尊容. 【まず, 〈とうとい〉干支のほうから拝見させていただき, そのあとで〈とうとい〉骨相のほうを拝見致します.】『金』30章
- (11) 夢梨就是賤妾之名. 【夢梨はわたくし〈いやしいめかけ〉の名前です.】『玉』20章
- (12) 学生賤名倪鵬. 【わたくしの〈いやしい〉名は倪鵬と申します.】『金』59章
- (13) 求小姐救奴賤命罷. 【お嬢様, 私の〈いやしい〉命を助けて下さい.】

『蜃』7章

- (14) 卑職一家八口、都靠着大人養活。【くいやしい官職に就いた〈私は家族八人共々殿様のお陰で生計を立てております。】『蜃』16章

4.2.3. 賢さの方略とその適用例

賢さの方略: (a) 他者のことを知的レベルの高いものとして表現せよ。

(b) 自己のことを知的レベルの低いものとして表現せよ。

次はこの方略の適用された実例である。

- (15) 賢契同郷、有個甚麼姓嚴的貢生麼? 【あなた〈かしこい友人〉の同郷の中で、嚴という名前の秀才がいますか。】『儒』7章
- (16) 賢兄之事、都在小弟身上。【あなた〈かしこいお兄さん〉の事は、わたしに任せて下さい。】『玉』75章
- (17) 小弟愚意已定、万万不能従命。【わたくしの〈愚かな〉意志は既に固まりましたので、ご命令に従うわけにはまいりません。】『玉』5章
- (18) 愚雖不才、“義利”二字却還識得。【わたくし〈愚か者〉はいくら才能がなくても、「義利」の二文字ぐらいは心得ているつもりです。】『紅』1章
- (19) 老拙今年痴長八十一歳。【わたくしは〈知能が成長せずに年ばかり取って〉今年八十一になります。】『金』61章
- (20) 親台之訓、愚父子時刻銘心。【お教えは、わたくしども〈愚かな親子〉はいつまでも心に銘記致しております。】『蜃』6章

4.2.4. 高さの方略とその適用例

高さの方略: (a) 他者を高いところに位置付けて表現せよ。

(b) 自己を低いところに位置付けて表現せよ。

この方略については、3.2.で詳しく述べたように、話し手と相手との上下、親疎などにおける社会的関係を物理的な位置関係に置き換えて表現することを規定するものである。例えば、

- (21) 求老爺俯納。【殿様に〈俯いて〉お納めいただきとう存じます。】『金』

- (22) 既蒙下問, 怎敢袒護. 【<下向きに> お聞きくださるなら, 隠さずにお答えしましょう.】『紅』68章
- (23) 大人垂愛, 小侄豈不知. 【殿様にご愛顧くださった<愛を垂らした>ことをよく存じております.】『儒』33章
- (24) 請問老先生, 高居何處? 【先生の<高い>お住まいはどちらですか.】『玉』10章
- (25) 在下……仰觀老先生公也不公. 【わたくし<下にいる者>は……殿様が公正かどうかを<仰向けに>拝見しようと存じます.】『好』5章
- (26) 我們合家大小, 登門去磕頭. 【うち一家揃ってお宅に挨拶に参ります<登ります>.】『紅』63章

4.2.5. 大きさの方略とその適用例

大きさの方略: (a) 他者のことを大きいものとして表現せよ.

(b) 自己のことを小さいものとして表現せよ.

次は「大きさの方略」が適用された実例である.

- (27) 一向久仰尊府大名. 【前前から<大きな>お名前をおうかがいしております.】『金』58章
- (28) 我與大人遞一鍾兒. 【殿様<大きな人>に一杯差上げます.】『金』71章
- (29) 何不搬來我小齋住着. 【わたしの<小さい>部屋に泊まってはいかがですか.】『儒』14章
- (30) 小婿尚有一事上告. 【わたし<小さい婿>, ちょっとお耳に入りたい事がございます.】『玉』20章
- (31) 小道蒙老爹錯愛, 迭受重礼. 【わたくし<小さな道士>は, 旦那様から過分なご愛顧をいただき, 度々結構なものを頂戴いたしております.】『金』39章
- (32) 只是賤内已經去世, 須要回去與小女商量. 【家内が亡くなったもので, まず帰って娘<小さい女>と相談しなければなりません.】『屐』16章

4.2.6. 豊かさの方略とその適用例

豊かさの方略: (a) 他者が豊かであるように表現せよ。

(b) 自己が貧乏であるように表現せよ。

この方略の適用された実例は次の通りである。

(33) 此自是貧儒痴想。【これはわたくし〈貧しい読書人〉の妄想にすぎません。】『儒』11章

(34) 窮内相没什麼，這些微禮兒與哥兒要子。【わたくし〈貧乏宦官〉はなにでもあります。つまらん物だが、坊ちゃんの玩具にさせていただきたい。】『金』32章

(35) 娘子怎的這兩日不過貧家吃茶？【奥さん、この二、三日、〈貧しい〉家にお越しになりませんか。】『金』3章

(36) 貧僧酒肉齊行。【てまえ〈貧しい僧侶〉は酒でも肉でもなんでもやりませう。】『金』49章

「豊かさの方略」が実際適用された例には、マイナス評価が利用されたものばかりである。成立するはずの他者へのプラス評価が、他人への礼儀的な言語行為として実際の言語表現に現れなかった。この現象は、富に対する文化的意識の影響によるものだと思われる。貧乏を好ましくない状況とし、富を好ましい状況とする一方、富が「唯利是圖」（私利のみをはかる）、「利欲熏心」（利に惑わされる）のようにマイナスに評価されることがあるということから、この方略の（a）の適用が礼儀に適うような表現から却下されたのだろう。しかし、「窮」、「貧」が自己へのマイナス評価として成立することから、この尺度が暗に潜在していることが分かる。この豊かさの尺度のプラス評価の表現は、富を潔しとしない儒教意識の影響により、表現の表層に現れなかったと見ることができる。

5. 伝統文化の礼儀と敬語

中国社会では、従来、円滑な人間関係や社会秩序を維持するために必要な倫理的規範のことを総じて「礼」と呼ぶ。「礼」が確立し制度化されたのは、古代中国の王朝周朝（紀元前 1050 ～ 前 256）のころだと言われている。その頃の「礼」は、当時の身分社会の秩序を維持するために、人々が自分の階級、身分にふさわ

しい行動をするように作られた社会的行動規範である。その後、この「礼」の規範は、「治国、修身」の方針の一つとして、孔子を代表とする儒教によって受け継がれ、孔子の六つの教科（詩、書、礼、樂、易、春秋）の一つとして体系化、理論化された。孔子の唱える「礼」には、社会制度としての儀式における礼と、日常の対人行動のモラルとしての礼という二つの概念が含まれている。対人行動における礼について『論語』には次のように書かれている。

「君子敬而無失，與人恭而有礼，四海之内，皆兄弟也。【君子は敬して失なく，人と恭しくして礼あらば，四海の内は皆兄弟たり】」（159）²⁾

『論語』では、人と礼儀正しく接することは立派な人間（君子）になる条件の一つとして上げられている。そして、

「非礼勿視，非礼勿聽，非礼勿言，非礼勿動。【礼に非ざれば視ること勿れ，礼に非ざれば聴くこと勿れ，礼に非ざれば言うこと勿かれ，礼に非ざれば動くこと勿れ】」（157）

礼儀にかなう行為は社会的に称賛され、礼儀に背く行為は非礼といって社会的に非難される。孔子以後、「礼」は儒教思想の中心的な存在になり、儒教のことは礼教とも呼ばれるようになった。中国の長い歴史の中で、「礼」はずっと人々の社会行動の倫理規範として従われた。礼節を重んじる文化的基盤は儒教文化の伝承と共に築き上げられた。

礼に関するもっとも古い文献の一つ『易経』には次のような記載がある。

「有天地，然後有万物，有万物，然後有男女，有男女，然後有夫婦，有夫婦，然後有父子，有父子，然後有君臣，有君臣，然後有上下，有上下，然後礼儀有所錯。【天地ありて然る後に万物あり。万物ありて然る後に男女あり。男女ありて然る後に夫婦あり。夫婦ありて然る後に父子あり。父子ありて然る後に君臣あり。君臣ありて然る後に上下あり。上下ありて然る後に礼儀錯（お）くところあり。】」（313）

『易経』のこの文章は、宇宙の秩序から家族の秩序が生まれ、家族の秩序から

2) () 内のページ数は、それぞれ次の日本語訳による。『論語』金谷治訳注、1963、岩波書店、『易経』高田真治・後藤基巳訳、1969、岩波書店、『儀礼』池田末利訳注、1978、東海大学出版。

社会の秩序が成り立ち、社会的秩序から礼儀作法が措き定められるという「礼」の形成プロセスに関する記述である。ここでは「礼」の基本は秩序だということが示されている。そしてその秩序は常に二極対立の形で構成されている。この二極対立の構図から古代中国人の世界に対する捉え方、認識のパターンが見られる。

『易経』(211)によれば、「天尊地卑，乾坤定矣。[天は尊く地は卑しくして，乾坤定まる。]」，宇宙の秩序の中で，天は支配的な立場にあり，尊ぶべき対象であるが，地は従属的な立場にあり，卑しむべき対象である。天と地にそれぞれ尊卑の価値的判断がなされている。

このような二極対立の宇宙観から生まれた「礼」もまた基本的に二極対立の構造を呈している。「礼」の二極対立の秩序にも，また支配的な立場と従属的な立場の両方に分かれる。『易経』とほぼ同じ時期に書かれた礼に関する典籍『儀礼』には，対面行動においていかに自分の身分と立場に応じて礼儀的に振る舞うべきかについて細かく規定されている。その規定の中で，ある特定の軸の両極にそれぞれ支配的な立場を示すプラスの価値と従属的な立場を示すマイナスの価値が与えられ，対人行動においては，常にプラスと見なされる極の位置に，社会的上位者を据え，同じ軸のマイナスの価値を与えられた極に自分を位置付けることが礼儀的である。たとえば，北と南，西と東，左と右などにそれぞれプラスとマイナスの価値的評価が与えられ，対面行動においては，社会的地位の高い人，賓客などの立場にある人を，東南に面する場所と自分の左側に位置させることを礼儀的な行動として『儀礼』は次のように規定している。

「凡燕見于君，必辯君之南面。[すべて君に私的に会見するには，必ず君が南面しているかどうかをたしかめ(てからす)る。]」

「出迎于門外再拜。賓答再拜。主人揖，入門右。賓奉執，入門左。[(主人は大門を)出て(賓を)門外に迎えて再拜する。賓は(これに)答えて再拜する。主人は揖して，門に入って右にゆき，賓は執を奉じて，門に入って左にゆく。]」(178-194)

このように，古代中国社会では，礼をわきまえるということは，非言語的対人行動においては，物理的に東西，南北，左右などの軸の上で相手をプラスと評価される方位に，自分をマイナスと評価される方位に位置付けるということを意味

する。現存の『儀礼』には言語行動に関する規定は記載されていないが、本稿で指摘した近代中国社会の例でいうと、言語行動において礼をわきまえるということは、表現上「貴さ、高さ、大きさ、賢さ……」などの軸の上で相手をプラスの位置に、自分をマイナスの位置に位置付けて表現することを意味する。

近代中国語の敬語における二極対立の価値的評価の構造は、伝統の中国社会での二極対立の秩序を規定する倫理観、更には、二極対立の宇宙観の延長線上にあるものだということができよう。このように近代中国語の敬語は中国の伝統文化の世界観、価値観と首尾一貫している。

用例出典

『金』:『金瓶梅詞話』	100章	蘭陵笑笑生	万歴丁巳版	17世紀(明)
『玉』:『玉嬌梨』	20章	夷荻散人編次	本衙蔵版	17世紀(明)
『好』:『好逑傳』	18章	名教中人編次	萃芳楼蔵版	17世紀(明)
『儒』:『儒林外史』	56章	吳敬梓	嘉慶丙子版	18世紀(清)
『紅』:『紅樓夢』	120章	曹雪芹, 高鶚	庚辰本	18世紀(清)
『屢』:『屢樓志』	24章	禺山老人編	嘉慶12年刻本	18世紀(清)

参考文献

- 池上嘉彦 1985 『意味論・文体論』大修館書店
- Grice, H. P. 1975 Logic and conversation, P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*. New York: Academic Press, 41-58.
- Gu, Yueguo 1990 Politeness phenomena in modern chinese, *Journal of Pragmatics*, 14. 2: 237-257.
- 小泉 保 1990 『言外の言語学』三省堂
- Lakoff, George and Johnson, Mark 1980 *Metaphors we live by*, The University of Chicago Press, 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸訳『レトリックと人生』1986 大修館書店

- Leech, Geoffrey N. 1983 *Principles of pragmatics*, 池上嘉彦, 河上誓
作訳『語用論』1987 紀伊国屋書店
- Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics*, Cambridge University Press, 安
井稔, 奥田夏子訳 『英語語用論』1990 研究社
- 彭 国躍 1991 「明代中国語の敬語とその語用論的方略——『金瓶梅詞話』の
会話文分析」『中文研究集刊⑨』白帝社 29-52.
- 王 力 1957 『漢語史稿』科学出版社
- 山梨正明 1986 『発話行為』大修館書店

Polite Expressions in Early-modern Chinese and Their Pragmatic Strategies

Guoyue PENG

(The Japan Foundation, Japanese Language Institute)

It is a known fact that in early-modern Chinese there were many ways of expressing politeness, but they have not studied systematically. This paper investigates the features and the system of polite expressions in early-modern Chinese in three aspects from a pragmatic perspective.

1. Non-deictic Feature

Polite expressions in Japanese have certain specific linguistic forms, such as (お, ご), but in early-modern Chinese the same politeness could be expressed by many different expressions. For instance, when calling somebody by name, Japanese will only say (お名前), but in early-modern Chinese they used “貴姓, 高姓, 上名, 大名, 賢名” etc. and polite expressions were not specified and symbolized as social deixis.

2. Conversational Implicature Feature

Unlike polite expressions in Japanese, those in Chinese all have clear literal meanings, such as 大 (big), 小 (small), 下降 (descending), 登堂 (ascending). The meaning of polite expressions was the conversational implicature derived from the literal meanings of these words. The author proposes an inferring process of the conversational implicatures derived from the literal meanings of polite expressions.

3. Pragmatic System

The derivation of the conversational implicature of polite expressions in early-modern Chinese was governed by a set of pragmatic rules. The author proposes the maxim of evaluation which governed polite expres-

sions in early-modern Chinese.

Maxim of Evaluation: (a) give positive evaluation to the others as much as possible, (b) give negative evaluation to oneself as much as possible.

The author also points out that in early-modern Chinese society, when applicable, this maxim was restrained by the following criteria as for what was positive and what was negative evaluation.

1. quality
2. nobility
3. intelligence
4. height
5. size
6. economic status

For example, in the big-small criterion, one should call the interlocutor and the things belonging to him big, such as 大名 (big name=your name), 大人 (big person=you), 大官 (big officer=you). Likewise one should call oneself and the things belonging to him small, such as 小人 (small person=me), 小房 (small house=my house), 小婿 (small son-in-law=my son-in-law).

(改稿論文受理日 1992年11月9日)